

『パック・イン・ミュージック』創世記

～妖精パックは今も～

武本宏一 (TBS)

『パック・イン・ミュージック』初代出演者



題字 中川 順

みん
な
の
話
う
う
民
放
史

『パック・イン・ミュージック』は、昭和42年(1967)7月にスタートし、57年7月終了まで15年間続いたTBSラジオの深夜のベルト番組(月金)である。

昭和42年といえば、高度成長も爛熟期にさしかかり、テレビ、洗濯機、冷蔵庫の三種の神器も普及し、街にはヒッピーも出現する一方、厳しい受験戦争に勝ち抜くべく、徹夜で勉強に励む若者たちも激増していた。

当時TBSラジオは深夜は放送休止時間だったが、テレビにお客を奪われ、どん底のラジオが、こうした『深夜族』に目をつけたのも当然の成り行きだったろう。

『深夜というラジオフロンティアに、魅力ある番組を開発せよ!』。この年の春、ラジオ局第二制作部に大号令が下り、それぞれが一言を持つ選り抜きのディレクターが企画会議に招集された。待ってましたと、日頃あたためていた企画や出演者を開陳して、なかなかまとまらない。連日の百家争鳴のあと、何とこの私が企画のまとめ役を仰せつかった。

これは大役、これは大変…苦悶の数日間が過ぎた真夜中、ふと私

の脳裏をかすめて飛ぶ影があった。『そうだ、パックだ。この番組は、パックだったのだ!』私は思わず膝を叩いた。

パックとは、シエークスピアの『真夏の夜の夢』に登場する、いたずら好きの妖精である。真夜中に姿を現し、人々に媚薬を振りまいたり、魔法をかけたたりしては、朝、姿を消す。まさに、この深夜番組にぴったりのキーワードではないか!小躍りした私は、鉛筆を走らせるのもどかしく、一気にまとめの企画書『パック』を書き上げた。

あのキンキンがパックの声!?

番組は何とこのご時世に日産自動車の一社提供が決まり、『日産パック・イン・ミュージック』という正式名に決まった。

後述するが、『パック・イン・ミュージック』はいわば曜日ごとにまちまちの専門店が軒を並べる商店街のような番組で、これをひとつのイメージで統一するため妖精パックの声を毎晩サウンド・ステッカーの形で活躍させることにした。

早速パック役のオーディション

ところで、このオーディションに太い声で「ほくはパツクだ：」とやる男性がいた。一同大笑いだつたが、このずんぐりした青年こそ、後にTBSの午後ワイドで活躍する「キンキン」こと、愛川欣也さんの若き日の姿だつた。

7月31日(月)深夜、正確には火曜0時30分。ファンファーレに続く矢島正明のタイトルコール“日産パック・イン・ミュージック”でいよいよ番組はスタートした。午前3時までの生放送だ。

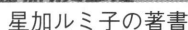
スタート時のラインアップは、
月曜が増田貴光、戸川昌子。火曜は八城一夫、やまのべもとこ。水曜は田中信夫、北浜晴子。木曜は野沢那

私は金曜パックを担当した。なべおさみは、当時クレージーキャッツの一員の若手芸人だったが、明大出身の知性と社会への関心の高さを兼ねそなえ、私は渋谷にたむろするアングラ族や警視庁前に集結するデモ隊と話をすべく、彼にデンスケをしょってもらって出かけたものだ。

星加ルミ子は、当時『ミュージックライフ』誌編集長。日本人ではじめて、その前年彗星のごとくデビュー、全世界を席巻したビートルズに、単身渡英してインタビュウに成功した女性だった。最新の音楽情報を紹介してもらうこと

ユニークだったのは映画評論家増田貴光と作家の戸川昌子の月曜パックだ。担当の岡本安正さんは、起用の意図をこう振り返ってくれた。「あの頃はホモ、レズなどは差別にあって、どんなに才能を持った人でも白い眼で見られていた。そうしたいわれなき偏見を打破しよう」と、ぼくはあえてそうした噂の絶えなかったご両人を起用したのです」。

しかし、バックといえは、何と



若者たちに語りかけるナチ・チャコ



若者文化の発信基地となった終夜放送番組
野沢那智・白石冬美が受験生の友に

いつても番組終了までの15年間を
完走した野沢那智、白石冬美のナ
チ・チャココンビに止めを刺すで
あろう。知名度の点ではまだまだ
のお二人だった。「やあやあ諸兄
けい」というナツちゃん呼び
かけで始まる木曜のパックは、受
験生を中心とした若者からの投書
をひたすら読み上げるという至っ
てシンプルな構成だったが、その
投書は見ると山積みとなり、つ

いに、一週間に数千通を超えると
いう、他曜日パックを圧倒する人
気となった。

有名なコーナーに「お題拝借」
がある。たとえばある週のテーマ
に「ある恋の物語」が出される。
すると自分の体験に基づいたさま
ざまな恋物語が山のように寄せら
れる。その中から厳選されたユー
モアやウィットに富む10通ほどが
次週に放送され、聴いている若者
みんなの共感を呼ぶ。

ナチ・チャコパックを通じ、受
験勉強の辛さや恋の悩みなどを互
いに訴えることで、孤独な受験生
や、若者たちの間に一種の連帯感、
同世代意識といったものが生まれ
るのだ。

「おげんきよう」というチャ
コちゃんの終わりの挨拶とエンデ
イング曲「シバの女王」を聴きな
がら、若者たちは明日からの競争
の前の、しばしの安眠をむさぼる
ことが出来た。

そう、「パック・イン・ミュー
ジック」とは若者たちの「もう一
つの心の広場」だったのだ。
こうして放送開始一年ほどでパッ
クブームが到来した。

「スタッフが何もやらなくても、



公開生放送

私たちが「パックメイト」と名づ
けた聴取者たちが、勝手に機関紙
を発行したり、イベントを開いて
くれたりしたものです」。そう
回想するのは、番組の中でも熊沢
ディレクターとして有名になっ
た、ナチ・チャコパックの熊沢敦
さんである。

局のほうでも、神宮の草野球場
を借り、日産の大型トレーラーを
屋台にして、パック盆踊り大会を

毎年のように開いた。その後『オ
ールナイトニッポン』のニッポン
放送、『セイヤング』の文化放送
とも交流し、亀淵昭信さんや落合
恵子さんも一緒に、日比谷野外音
楽堂で「深夜放送まつり」を開き、
エールの交換を行った。



評判を呼んだ『パック』の本の数々

ある夜、ふと私の脳裏に現れた
妖精パックは、思いもかけず大き
な社会現象になってしまった。

それは、まだケータイもインタ
ーネットもなかったあの時代、若
者たちのもう一つの広場。そのも
のであった。

テレビになったパック

そのナチ・チャココンビがテレビにも登場したのは、昭和45年4月のことだった。世間が70年安保で大揺れのこの年、私自身も大きな転換期を迎えていた。

TBSが、報道の自由をめぐって、いわゆるTBS闘争の余波の中にあったこの年、これからはこの局とも自由に組んでテレビ番組を作る時代だ、番組制作会社を創ろうと、2月、13人の社員ディレクターが集団退職し、(株)テレビマンユニオンを創設したのだ。

記念すべき旗揚げ番組は、『フジテレビの『ハットピンキー』という音楽番組、そしてTBSテレビの深夜ベルト番組と決まった。

テレビ局出身のメンバーの中でたった一人ラジオ局から参加した私。その私が少々気負いこんで「テレビにも深夜の解放区をー」などと主張したところ、これが通って、『TVジョッキー』という番組が決まった、いわば「テレビ版パック・イン・ミュージック」。さて、第一回の収録。企画は私、ディレクターは今野勉。スタジオでナチ・チャココンビが投書を読

むかたわらで、イラストレーターがボディペインティングをしたら、突如、三上寛がバイクに乗って、乱入したり…、訳の分からぬまま終了。サブタイトルは「何事か始まったべし」…云い得て妙だった。

いまや38年の実績を誇るテレビマンユニオンも、その第一歩は妖精パックに後押しされてのものだった。

それぞれのパック

私が「パック」からもTBSからも飛び出した後も「パック」は賑やかな話題を提供し続けた。何しろ終了までの15年間で、延べ80人に近い司会者たちが出演したのだから…。



水曜パックの北山 修

昭和44年3月には、ザ・フォー・クルセダーズの一員で京都府立医大生の北山修が登場。その水曜日パックは文字通り「戦争を知らない子供たち」が訴えかける場となった。

この曜日にはその後も吉田拓郎、小室等といった大物フォークシンガーたちが次々と登場した。彼らは概してテレビに出たがなかったもので、なおさら、ファンたちは「パック」にかじりついたのだ。

この年の10月、「パック」は午前5時まで枠大され、午前3時から第二部は若手アナウンサーの出演の場とした。

彼らは日ごろのアナウンサーの約束事を離れ、のびのびと個性を発揮、これが活気を呼び、やがて梶井論平をはじめ若手アナが第一部に躍り出る。

一アナウンサーから個性豊かなパーソナリティへ、彼らに成長の場を与えたのも妖精パックの仕業だった。

ほかにも話題はいろいろある。永六輔さんが5月3日の憲法記念日に、3時間ぶつ通しで憲法全文を読み通し、その意義について考

えたり…。オーディションで落ちた愛川欣也も司会者として凱旋したが、「ポール」「デトラ」といった怪しげな言葉を連発して笑わせたり…。『走れコウタロー』で大ヒットの山本コータローは、相手役で気鋭の映画評論家の吉田真由美と番組が縁で結婚してしまったり…。大村万理子さんのパックでは、「くたばれテレビコーナー」が人気だったが、ある日「ひよっこりひよたん島特集」を組んだところ、当の作者井上ひさしさんから資料と共にファンレターが届き、一同感激したり…。それぞれの「パック」が特色を発揮した。



5時まで拡大した「パック」のワッペン

パック終了反対デモ

数々のエピソードを残した「パック」にも終焉の時が来た。

15年間、若ものたちに愛され、感動と共感と呼んだ「もう一つの別の広場」、その「パック・イン・ミュージック」が姿を消したのは昭和57年7月31日だった。

「来週をもって終了」…の予告アナウンスを聞き聴取者たちの反響は凄まじかった。

昭和57年夏、私もそれを目撃したことははっきりと憶えている。プラカードを担いだ奇妙に静かな

一団が清水谷公園を出発し日比谷公園めぐりデモ行進をしていた。それは「パック終了反対デモ」だった。反対デモ行進というより、私には番組終了を弔う葬列のように見えた。

時代がまた一つ、ゆっくりと回転していった。

パックと私

妖精パックは、これで死に絶えたのだろうか。いやいやパックは今も思わぬところに出現しては妖術を振るう。

平成13年、TBS創立50周年に



最後の放送ナチ・チャコ

は「パック・イン・ミュージック PRESENTS『あのラジオ、あの歌、あの青春』」を放送。また平成18年正月にはファンの熱い声にこたえて『甦る伝説ナチチャコパック』が放送された。

私事にわたって恐縮だが、3年ほど前に、私は自伝エッセイを自費出版した。その中で『パック・イン・ミュージック』誕生のいきさつにも触れておいたのだが、ある日その出版社・新風舎社長松崎義行氏にお会いした際、氏は私にこういふのだった。「武本さん、ぼくは高校生の頃、小島一慶さんのパックの大ファンでした。よくヘタな詩を投稿しては、番組で読み上げてもらいました」…。

そしてある日、この少年詩人の頭にひらめいたものがあつた。ラジオ番組でも無名の投稿だけであれだけ面白い番組が出来るなら、出版の世界でも、一般の人たちの本を積極的に作り出版すること、今までにない出版文化を生み出すことが出来るのでは…。こうして25年前に、この自費出版会社を興したのだという。

今、この出版社は時に問題を指摘されているが、私はこの理念に

共感して、現在、この社に籍を置き、新しい原石の発見とPRのお手伝いをしている。

これも妖精パックが取り持ってくれた縁であろう。

パックは不滅です！

さて、パックのご本尊ともいえる。ナッツちゃんこと野沢那智さんの今について。

先日数10年ぶりにお会いした。彼は今、人形町にある演劇スクール《パフォーミング・アート・センター》の代表を務め、演劇や声優にあこがれる若者たちの指導に当たっている。

昔と変わらぬ、前髪バラリにセーター姿のナッツちゃん。「いやあ、パックとは縁が切れなくてね。この学校の略称も、ほら、P・A・C: パック! そう読めるよう、ぼくが命じたんですよ」嬉しい話だなあ。

妖精パックは、まだまだあちこちで、様々な人たちに思いも寄らぬ魔法をかけ続けるに違いない。

資料提供

・東京放送

・中村登紀夫

・筆者